

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

1. 工学部・工学研究科

研究 1-1

工学部・工学研究科

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

Ⅰ 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況について、毎年 800 件程度の論文が書かれており、教員一名当たりの論文数の大学ランキングにおいても、13 位に位置している。また、それらの引用度も高い。これらは特定の分野に偏ることなく、幅広い分野において活発な研究が行われていることも特筆すべきである。研究資金の獲得状況について、科学研究費補助金は、平成 19 年度、173 件の採択で、直接経費で 4 億 2,000 万円程度であり、増加傾向にある。民間企業とも毎年 200 件程度の共同研究で 5 億円ほどを受け入れている。受託研究も、法人化以降増加してきており、平成 19 年度は件数で 79 件、金額で 8 億 9,000 万円程度となっている。知的財産からみた研究活動の状況においては、この数年 150 件を上回る発明特許の届出が行われており、教員一名当たりの特許公開件数は全国立大学法人の中で、第 1 位である。産官学連携から見た研究活動の状況については、産官学連携センターを設置して促進をし、その成果が現れていることは、優れた成果である。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、ナノテクノロジー・材料分野、エネルギー環境分野、情報通信分野において、優れた研究成果が得られている。これらの中でも、再生医療用生体材料の開発に対して、卓越した研究成果が生まれている。また、創薬化学の分野でも、優れた研究成果が生まれている。この研究は、新技術を待望している製薬業界の期待に応えるものである。社会、経済、文化面では、社会システム工学・安全システム、電子デバイス分野の研究において、優れた研究が行われていることなどは、相応な成果である。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 3 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

